足摺の椿

足摺岬は約 60,000 本の椿（ツバキ）の木立で有名です。椿は冬に開花し、岬に赤やピンクの色味を添えます。風景はすべてが自然のままというわけではありません。この辺りは木材にするため地元の人々が木を伐採したためにこのような景観になりました。姥目樫は薪に使われ、メダケは壁の補強からざる作りまであらゆるものに使われました。これらのざるは、土佐清水の有名な鰹節を作る際に、弾丸かつおをいぶす時に使われました。椿だけが残されたのは、その最も価値ある産物が、実の種から抽出される油だったからです。この油は現在も化粧品に使用されています。

建築資材の現代化でメダケの需要がなくなると、生育の速い植物が繁茂し始め、ついには椿の生育地にまで及び椿を脅かすようになりました。2016 年に、足摺岬の自然を守る会や環境省、その他いくつかの関係団体が一体となってヤブツバキ再生プロジェクトを開始し、岬に立つ灌木からとれた種を利用し、20,000 本の椿を新たに植えることを目指しています。竹は椿のスペースをつくるためにほとんど伐採されましたが、強い海風をよけるために岸沿いにはそのまま残されています。